

矣日一具足居士と諭した。妻女は後れて没したが
 一珠院妙中日事信女と號し、本堂の東なる塋域内に
 に、東向に自然石で高さ臺石共二尺四寸許の碑面
 に、夫婦の戒名を刻して、裏面には没年月日を記
 してをる。此の墓は彼の日本技藝の總司といはれ
 た三代目歌右衛門、即ち中村梅玉が晩年參詣する
 に不便なので、同型同式の移しを谷町法妙寺に造
 つて、これに參詣したのである。弘化四年未の二
 月、翁の曾孫と稱する狂言堂門三郎春翠(門左衛門
 藤原爲御と名乗つて、別)及び近松門松(後に門三郎と改め號
 に春の家織月とも稱した)を十方舎一丸さいつ
 た)と、その門人近松門造、即ち呑空齋吐月等が發
 起して、翁の百五十年忌取越しを行ひ、廣濟寺、
 法妙寺、兩墓の修繕をした時、臺石を取りかへた
 のである。

月十五日とある。軸面に日昌手録がある。此他釋
 迦、文珠、普賢の畫、及び扇面の粗畫等、いづれ
 も梅信の遺墨を傳來したが、今は散亂して近き里
 人の有になつてをる、次に過去帳について一言し
 て置きたいのである。

近松曲稽古日記 (一)

東京 細川 齋聲

今日から「酒吞童子枕言葉」を、「衣洗ひ」より習
 ひ出す。これは近松曲の中でも、珍ぞすべき都類
 で、近來の太夫で、誰の物語であつたといふ語も
 聞かず、無論、板本も出來てはをらぬ操で興行
 されるのは、後作の「酒吞童子話」の方に極つてゐ
 のに、この崑山の片玉を拾ひ得たのは、譯もなく
 嬉しかつた。古曲特有の「文彌」の多いもので、一
 中節にもあるだけに、それに肖通つた風のある曲

である。——七月二十六日。

『酒呑童子』初回の稽古に發聲。鳥渡變つた節には、「江戸が、り」、「平家が、り」、「入さん」、「つゆり」、「八つゆり」等、皆會得し悪くはなかつた。衣洗ひの女の詞が、全部地色になつてゐるので、このところが尤も語り悪い、そのうちで「可愛や、不惑や、妹も、ゆふべの寢酒に引裂かれ、今の命も覺束なく、血をすぎ捨て死骸をも、せめて清めん志」といふ文句の、この「今の命も覺束なく」といふのは、衣洗ひの女自身を言つてゐるは無論だが、省筆のために、引裂かれた妹の事を言つてるやうで、變だ。文を讀ますのでなく、曲のみを聽かせるのでは、こんなところの理解が一層困難である。全體這曲には、難解の文句が尠なくない。みあぐればばんじんのせいげつしのぎをけづり」を、一中節の「扇拍子」には、見上れば萬尋

の晴月しのぎを削り」となつてゐるが、附會の宛字ではあるまいかと思はれるのだ。——八月八日。

『酒呑童子』の稽古は、第二回目に進んだ。このところの曲調は、風變りも極度になつて來て、頼光が鬼が城に着くまで、纒か二三行の文句の間に、「おくり」が一つ、『三重』が一つ、重つてあり、酒呑童子の出には、一句一句、合の手がある上、メリヤスで謡が、りに語るところもあるといふ風だ。この出の紙數で一枚ばかりの一節が、丁度五分間を要するなどは、淨瑠璃曲中他に類例があるまい。も一つ節使ひに感じたのは、衣洗ひの女の歎きを承けて、「頼光泪ぐみたまひ」といふ文句が珍らしく「本節」になつてゐる事である。元來「本節」といふ節は、「小おくり」や、「うきおくり」と共に、一段のマクラにあつて、無意味に叙景叙事の文章に嵌められてゐるものだが、自分はその音律の、盤

桓低徊した一種の情趣を帯びて、「小みくり」や、「うきおくり」と同一感を起すべく、あまりに多く哀調を齎らすのを異としつゝあつたので、這曲のこの節に出會つて、適材を適所に措いた用意に切實に滅されたのだ。

近松は、後年「博多小女郎」で、鬼の泣聲を「くわんく」と形容した筆才の發露を示して、こゝには復た鬼の詞の「いにんぎやらいがるまんすうごうくろう」といふのがある。「國性爺」の唐音の「おいらいくびんくわんたさつおんく」なども、つまりはこれを轉換したに過ぎまい、對比して愈々妙味を覺れた。——八月十六日。

『酒呑童子』第二回目的稽古に發聲。この間は曲風の變つてゐる割合に、節に手の込んだところがなないので、比較的樂に通過した。語りながら圖らず氣がついたが、鬼の詞の「いがるまんすう」のがは

普通語の半濁音に言はず、九州語のやうに濁音に言ふのが、作者へ對して忠實な語り方であらう。

——八月二十八日。

『酒呑童子』の稽古は、第三回目に進んだ。曲調は前回と比べて、平凡で、「五重ゆり」といふひと節變つたのがあるきりだ。元來この酒呑童子枕言葉は、山本土佐椽の『酒呑童子』へ、謠曲の『大江山』を加へ、これを近松の例の才藻で潤色したものだ、この邊は土佐椽のと、文章も大同小異である、が、頼光のお流れを酌む酒の對手はあつちば網になつてゐるのを、こつちでは公時になつてゐる。これは「加賀に菊酒、南都にかすりぬ。」云々の詞の上から、その詞が酒豪の言草らしい上から、どうしても公時に限るやうに考へられる。——八月二十九日。

鬼むわんく

小野 椽華

『酒呑童子』の稽古は、昨日第三回の發聲を始め今日は第四回目に進んだ。酒呑童子が物語の間は山崎美成が『世事百談』で「名人の書けるものは、かゝる荒くれたるものをもの哀れに見する事、筆力の妙なり。」と嘆稱した名文だが、自分は復たこの作曲の、それに劣らぬ精力が盡されてある事に驚かされた。鬼氣人を襲ふとは、かういふ音曲の事であらう、丁度針金三味線を聴いてるやうで一へ這入る鈍い音が、不思議にもの凄く響く、そして手の込んでゐる割に、木琴を弾いてるやうに少しも冴わた音がしないから、ますます「他界の音楽を聴くやうな感じがする、面白い音曲といへば賑かな、派手なもの」と極つてるやうに思はれてるが、こんな「寂び」、「凄味」が、同じ三筋の糸から出るといふ事は、淨瑠璃三絃の權威として何とも喜ばしく考へられた。

九月十日。

(淨瑠璃印象記「摘録」)

去月二十八日の早朝、山縣公爵の君を無隣庵に訪はんとて、烏丸の旅宿より俣を北へ走らするに、骨に透る寒さに伴ひ一陣の血腥き風が吹いて來た、只見る頭の片つら脱毛げたる、隻眼の眇たる、痘痕面に髭のもや／＼生へたる、五人、六人、太き棍棒を脇挟みたるあれば、重げなるもの肩上たるありていづれも怪しげなる着衣に毛脛あらはし、息喘切て幕地に馳せ來つた、驚く俣夫よりも余はまづ胸を躍らせた。

渠等は物に追はるゝ如く、振返り／＼單走に遁るのである、余は車上に身を反らして、不圖渠等の背面を見た。

重げなるものは南京米袋であつた、さらば竊取した米か、否々鮮血淋漓と渠が腰邊に滴下しつゝ、あ